

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：35402
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：26770112
研究課題名(和文)19世紀後期アメリカにおけるスクラップブック研究

研究課題名(英文)Scrapbooks in Late Nineteenth Century America

研究代表者

本岡 亜沙子(MOTOOKA, Asako)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：70582576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、19世紀後期アメリカに流行したスクラップブック、ならびに文学テキストにおけるスクラップ帳の表象をとおして、印刷物が大量生産・消費される時代に対する作家の問題意識を追究することにあった。古典という一極化した知に範を求めるのではなく、周縁的なものにも思いを馳せるといった点において、玉石混交の情報が寄せ集められるスクラップブックが、アメリカの民主主義の精神を反映したものであることを論証した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to trace how some American writers, who were also scrapbook makers, saved, organized, and transmitted knowledge in late nineteenth century, by shedding light on their scrapbooks, consist of newspaper clippings, pictures, letters, and ephemeral items. When the emergence and increased accessibility of printed materials sparked a new trend, those scrapbookers creatively and critically juxtaposed and remixed arbitrary and decontextualized materials with a pair of scissors. The scrapbooks demonstrate those makers' complex relationship between high and low realms of cultural production in the United States.

研究分野：米文学

キーワード：アメリカ文学 アメリカ文化 スクラップブック ルイ ザ・メイ・オルコット

1. 研究開始当初の背景

新聞など印刷物が大量生産・大量消費され始めた19世紀後期アメリカにおいてスクラップブックは流行した。印刷技術や流通網、郵便制度など各種出版インフラが整備されたポストベラム期のアメリカにおいて、かつて贅沢品であった書物は人々にとって身近なものになった。安価本や海賊版が出版されるとともに、新聞や雑誌も市場に出回る。玉石混交の情報が身の回りにあふれるなか、価値のある情報を書き留めている間に次の印刷物が押し寄せてくる。矢継ぎ早に表れる情報に頭を悩ませる人々にとって救世主のような存在になったのがスクラップブックであった。彼らはペンをハサミと糊に持ち替え、お気に入りの情報を転記するのではなく、スクラップブックにカットアンドペーストしていく。

従来、作家に関する主な一次資料はテキストと日記、手紙であった。だが、ハーヴァード大学ホートン図書館には、19世紀アメリカ女性作家のルイーザ・メイ・オルコット(1832-88)が作った2冊のスクラップブック、ならびにその母親アピゲイル(1800-77)と父親ブロンソン(1799-1888)が制作した『日記帳』と表紙に書かれたスクラップブックが所蔵されている。その中には日記以外に新聞記事、手紙や電報、時には亡き家族の髪の毛など、種々雑多なものが貼り付けられている。文字に起こしにくいこれらの史料は、従来あまり注目されてこなかったものであるが、文学研究を深める上で極めて重要な情報源と言えよう。

このように史料的高価値のもの、国内外を問わず注目されることは皆無に等しかった。そこで本研究ではスクラップブックを主要な一次資料として取り扱い、そこから浮かび上がる作家の思想や文学観を考察していくことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀後期アメリカに流行したスクラップブック、ならびに文学テキストにおけるスクラップ帳の表象をとおして、印刷物が大量生産・消費される時代に対する作家の問題意識やふるまいを追究することにある。情報過多の時代に、作家たちはハサミと糊を手を持ち情報を集め、記事を編集し、保存した。果たして、彼らはどの新聞や雑誌を読み、どの記事に興味関心を持ったのか。そしてその記事をどの順序でスクラップブックに貼り並べていたのか。スクラップブックという情報の集合体は、社会に対する作家のバイアスをありありと覗かせてくれるものである。

スクラップブックには、オリジナルの媒体にあった構成やコンテキストから切り離された情報が寄せ集められる。ハサミを入れる対象になったのは、従来人々の修養を担ってきた近代ヨーロッパ文学、ひいては古典も含

まれる。体系的な知が求められにくい時代において、彼らはどのように文学とのかかわりにおいて内面を向上させていったのか。本研究では、スクラップブックの登場が一般大衆の意識をどのように変化させたのか、論究した。さらに、ペンをハサミと糊に持ち替え、ハサミでモノを書くことという行為の同時代的意義は何かということについても追究した。

3. 研究の方法

本研究ではまず、ハーヴァード図書館に所蔵されたオルコット一家のスクラップブックを中心にデータを収集し、年代毎に整理し、分類した。収集した主なスクラップブックは、ルイーザ・メイ・オルコットの『スクラップブック』(1855)と『スクラップス』(1886?-88?)、ならびにその両親ブロンソンとアピゲイルの日記帳である。この日記帳は、スクラップブックと銘打たれてはいないものの、その要素が散見されるものである。新聞記事や雑誌記事の切り抜きはもちろんのこと、地図や講演会の入場券、催し物のチラシ、郵便切手、電信用紙、クリスマスカードやスケッチ、果ては葉っぱや花、亡き家族の髪の毛、布地など立体的なものまでそこに貼られているからだ。

次に、上記のスクラップブックに貼られている新聞記事や雑誌記事の出典元を可能な限り明らかにした上で、日記や手紙など他の一次資料(筆者が資料収集をしたハーヴァード大学所蔵の未公開資料含む)には含まれていない情報を洗い出すことで、スクラップブックの特徴を逆照射した。

さらに、スクラップ帳の登場するオルコット作品を精読し、そこに描かれたスクラップブック表象を分析した。そうすることで、同時代アメリカ社会においてスクラップブックの果たす役割を作家がどのように捉えていたのかを論究した。

4. 研究成果

(1) ポストベラム期アメリカにおける新しい教養としてのスクラップブック

スクラップブックには、オリジナルの媒体にあった構成やコンテキストから切り離された玉石混交の情報が寄せ集められている。人々の修養を担ってきた古典までもがハサミを入れる対象になった時代において、彼らはどのように文学とのかかわりにおいて内面を向上させていくのか。本研究では、娯楽に道徳をすべり込ませるのを得意としたオルコットの短篇作品におけるスクラップブックの表象に着目しながら、古典という一極化した知に範を求めるのではなく、周縁的なものにも思いを馳せるといった点において、スクラップブックがアメリカの民主主義の精神を反映したものであることを論証した。

本研究成果は、2018年度出版予定の共著『知のコミュニティ』所収の拙論「ルイー

ザ・メイ・オルコットのスクラップブックと新しいアメリカの教養」にて報告することが決定している。具体的な論の流れは以下の通り。第1節において古典教養が大衆化する状況を概観し、第2節では、スクラップブックの登場するオルコットの短編小説2本「小さな近所さん」(1874)と「壁の穴」(1883, 1890)を通して、古典の影響力を顧みず突き進むアメリカにおける新たな教養を浮き彫りにする。第3節では、ハーヴァード大学ホートン図書館に所蔵されている未公開資料、オルコットと彼女の母親のスクラップの一部を紹介しながら、ペンをハサミと糊に変えることの同時代的意義について論究した。

(2) オルコットの創作上のメカニズムについて

現代では、メディアをとおり、データベースを駆使して、さまざまな情報を切り貼りし、コングロマリットなものを作っていく作業がごく一般的に行なわれている。このような現代的現象はしかし、テクノロジーの違いこそあれ、19世紀アメリカ文学の創作課程にも見出せるものである。その一例として本研究では、オルコットとその周辺の創作仲間が、チャールズ・ディケンズ(1812-70)の作品を切り貼りしながら演劇の脚本を手掛けていたことを、彼女たちの未公開脚本「ポグラムの素人代理人」とその草稿2種を通して詳解した。

本研究成果は、2017年度出版予定の共著 *Thoreau in the 21st Century: Japanese Perspectives* 所収の拙論“Modernity of Louisa May Alcott's Unpublished Manuscript 'Pogram's Lay-vice'”にて報告することが決定している。具体的な論の流れは以下の通り。第1節において19世紀中葉にオルコットがディケンズの翻案劇に興じていた史実と、その背景にある同時代アメリカのディケンズブームについて論じる。また、彼女が所属していた素人劇団の活動と、同時代のボストン近辺における演劇文化との類似点や影響関係についても明らかにする。第2節では、ディケンズの『マーティン・チャズルウィット』の翻案劇とされるオルコットの未発表脚本「ポグラムの素人代理人」の生成過程を、同作品の3種類の原稿と原作テキストとを比較対照することによって分析する。その結果、その脚本がオルコットを含めた複数のディケンズファンによる共同制作作品であることを示した。第3節では、19世紀中葉に行なわれたオルコットの演劇実践を、20世紀後期以降のオタク文化や二次創作などの文化的現象、およびその批評から読み直す。具体的には、ヘンリー・ジェンキンスの「ファンダム」の概念や、東浩紀の「データベース消費」など、現代的なタームに置き換え解釈しながら、オルコットと演劇サークルによる創作実践の現代性を探っていく

た。

最終的に、彼女が複数人と社交しながら文芸創作に励んでいたことを明らかにした本草稿研究をとおり、作家個人の才能として論じられてきた創作が、実は複数の親密な人間たちの交渉によって織り成されていたということを描いた。

(3) オルコットの文芸創作上の戦略について

本来裏方に回る芸術家がセルフ・プロデュースを施し表舞台に出てくるという芸術の世俗化現象が1830年代以降のアメリカ出版業界に起こった。その契機は、印刷技術や流通形態、郵便制度の発達であった。その結果、大学や一部の名家にのみ流通していた印刷物を一般大衆が手にするようになった。読者層の多様化に伴い、出版業界が商業主義の方に舵を切り、職業作家も登場した。1830年代のアメリカは、ヨーロッパ文学とは異なるアメリカ独自の文学作品を創り出そうと文人たちが切磋琢磨した時代でもあった。果たして彼らはどのような作品を書き、どのような販売戦略を立て、アメリカの売れっ子作家になろうとしていたのか。

本研究では、文芸セレブリティの登場という視点から、海外のいわゆる「セレブ」作家であるチャールズ・ディケンズやオスカー・ワイルド(1854-1900)、そして19世紀中葉アメリカのオルコットとウォルト・ホイットマン(1819-92)、マーク・トウェイン(1835-1910)における、文芸創作上の戦略について比較検討した。その結果、アメリカが市場社会に転換し、出版が一大産業となった時代、作家たちが自身のブランド力を高めるため、自己宣伝活動やファンサービス、追っかけファンへの対応など、執筆業以外の活動に明け暮れていたことを、日記や書簡、エッセイにつづられた赤裸々な記録から詳らかにすることができた。

また、上記のようなオルコットの大衆迎合路線は、読み手の反応を意識しながら制作するという点において、社交の道具として用いられることの多かったスクラップブックとゆるやかに相通じるものがあるということにも言及した。

なお、本研究成果は、『広島経済大学研究論集』所収の拙論「19世紀後期アメリカにおける作家の宣伝活動——ホイットマン、トウェイン、ワイルドを中心に」(2016)と「19世紀中葉アメリカ文学におけるセレブ作家の登場——ルイザ・メイ・オルコットを中心に」(2015)にて報告した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

本岡亜沙子「ルイザ・メイ・オルコットのスクラップブックと新しいアメリカ

の教養』、倉橋洋子・竹野富美子・城戸光世・高尾直知『知のコミュニティ』彩流社、査読無、論文掲載決定、平成 30 年度出版決定。

MOTOOKA, Asako. “Modernity of Louisa May Alcott’s Unpublished Manuscript ‘Pogram’s Lay-vice’” Masanori HORIUCHI, ed. *Thoreau in the 21st Century: Japanese Perspectives*. 金星堂、査読有、論文掲載決定、平成 29 年度出版決定。

本岡亜沙子「19 世紀後期アメリカにおける作家の宣伝活動——ホイットマン、トウエイン、ワイルドを中心に」『広島経済大学研究論集』査読無、第 38 巻第 4 号、平成 28 年、145-52 頁、
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hue/metadata/12235>

本岡亜沙子「19 世紀中葉アメリカ文学におけるセレブ作家の登場——ルイザ・メイ・オルコットを中心に」『広島経済大学研究論集』査読無、第 37 巻第 4 号、平成 27 年、71-81 頁、
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hue/metadata/12188>

〔学会発表〕(計 3 件)

本岡亜沙子「ルイーザ・メイ・オルコットのスクラップブック」、日本ナサニエル・ホーソーン協会第 36 回全国大会、シンポジウム「陰画としての知のコミュニティ——ホーソーンの周辺事情」、平成 29 年 5 月 20 日、於：レイアップ御幸町ビル(静岡県静岡市)。

本岡亜沙子「オルコットの短篇小説と新しいアメリカの教養」、中・四国アメリカ文学会第 45 回大会、シンポジウム「アメリカ文学の独立」、平成 28 年 6 月 12 日、於：広島経済大学立町キャンパス(広島県広島市)。

本岡亜沙子「ディケンズファンのオルコットがつづる物語」、日本ソロー学会 2014 年度全国大会、シンポジウム「コンコードの作家たちと外国文学」、平成 26 年 10 月 3 日、於：北星学園大学(北海道札幌市)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

本岡 亜沙子 (MOTOOKA, Asako)
広島経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：70582576

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし